

## ほっとウッドクラフト

活動場所：4年2組教室

9月29日（火）9：20～10：25

提案者 高山 史

### 1 活動のねらい

木からものをつくったり木の手入れをしたりすることを通して、木の価値観をひろげたり、木を使うことの可能性を探ったりしながら、木と自分のよりよいかかわりをつくる。

### 2 なぜ「ほっとウッドクラフト」なのか

我が国は人がさまざまに木材を使ってきた歴史がある。家を建て、棚や箱をつくり、はしを架け、鋸の柄にし、樹皮を剥いで入れ物をつくった。人間は木材なくしては生きられなかったと考える。我が国では、特に気候や風土に適する材であることから、多くの木材が使われてきた。木の恩恵を受け取りながら、人々は生活してきたのである。しかし、高度経済成長期を経て、国内の林業は衰退傾向にある。それは、木が変わって、石油や金属の需要が高まったことが大きく関係しているだろう。それに伴い、放置された木がそのまま生長した結果、森や山が荒れてしまうということも起きている。

木製品には、石油製品や金属製品には変えられない温度や湿度、香りや柔らかさを感じられるよさがある。木育と称して、木のよさを伝えひろげようとしている団体も少なくない。木を取り巻く諸課題と木のよさの両方をとらえ、これまでにつくられてきた人と木のつながりを感じ取ることは、人と木がこれからどのようにかかわっていくべきかを見つめることになる。それは、子どもが自然とどのようにかかわっていききたいかという自然観を育むことにもつながると考える。

子どもは、木からものをつくったり木の手入れをしたりしながら、木とかかわる楽しみをつくっていく。木に触り、木のもつ質感を味わいながら、木のぬくもりを感じ取っていく。木があらゆるものに変化することを感じ取りながら木工をし、木が身近であることをとらえていく。木と豊かにかかわる中で、木に対する自らの価値観をひろげたり、木材利用の可能性を探ったりしながら、木と自分のよりよいかかわりをつくる子どもの姿を思い描き、活動名を「ほっとウッドクラフト」とした。

### 3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

#### ○木とかかわる楽しみをつくる

子どもは、木材を切ったり、削ったり、磨いたりしながら、木とかかわりを豊かにしていく。その中で、それぞれの木によって木目の違いがあることや磨けば磨くほど木の質感が変化することに気付き、木とかかわる楽しみをひろげていく。木とかかわることを楽しみながら木のぬくもりを感じ取る子どもは「もっと木材を使えばいいのになぜプラスチックが多いのだろう」「木をもっと使ってもらえるように他の人に伝わるいいな」と思いを膨らませ、木のよさについての自分の考えをつくっていく。

#### ○木のこれからの在り方を見つめる

子どもは、木製品をつくりながら木のよさについての考えをつくる。木に携わる仕事をしている人と出会い、共に活動しながら、その人の考えや思いを知り、木のとらえをひろげていく。その中で、木にかかわる課題に気付き、「木を無駄にしないってどういうことか」「木にとって切るのはよいのか」と木とかかわりを見つめたり、活動をつくり変えたりすることを通して、木と自分のよりよいかかわりをつくっていく。

### 4 対象とかかわる子ども

子どもは、木の力強さを感じたり、削って磨くと木材の形や質感が変化することに気付いたりしながら、木とかかわる楽しみをつくってきた。よりよいものをつくりたいと思いを膨らませ、木と遊ぶ研究所と出あった。木工で木目に着目することや木の形に合わせることの大切さを知った子どもは、木の特徴をとらえながら木工をすることの楽しみをひろげていった。

木と遊ぶ研究所の人とつながりをつくった子どもは、「どんな場所で木とかかわりをつくっているのか見てみたい」と思いを膨らませた。木と遊ぶ研究所のフィールドであるくわどり市民の森を訪れ、自分が切った木を使って木工をしながら、木とかかわりをつくっていた。子どもは、木工を通して多様に木とかかわる中で、木のよさについて自分が感じていることをためているのである。

## 5 本時の構想・展開

### (1) 本時のねらい

木と遊ぶ研究所の人と活動したことを振り返ったり、木工をしたりすることを通して、自分がつくりたい木製品を実現させようとしたり、木工について感じていることを共有したりしながら、木工をするこの楽しみを見つめる。

### (2) 本時の構想

#### ○ くわどり市民の森で使っていた道具を提示する

子どもは、くわどり市民の森を訪れ、自分が切った生木を使って木工をすることを通して、木の種類や形が違うことによる面白さに気付いたり、木そのものの質感や香りを味わったりしながら、木のよさを見つめていた。そして、子どもは、「教室でも同じように木工をしたい」と願っているだろう。そこで、教師はくわどり市民の森で伐採してきた木や使用した道具を用

### (3) 本時の展開 101・102M/全257M (65分)

時間	番号; 子どもの活動 ・ ; 子どもの姿	○ ; 教師の手立て
10	<b>1 くわどり市民の森で活動したことを話す</b> ・木と遊ぶ研究所の人とつくった鉛筆をまたつくりたいと話す。 ・森にあった木の種類がいっぱいで木によって硬さとかが違ってたと話す。 ・東條さんは、曲がった木をわざと選んで、「仙人の木だ」と楽しそうにしていたと話す。	○子どもの話題に合わせて、活動している写真や作文シートの記述を提示する。
35	<b>2 自分のやりたいことに取り組む</b> ・木と遊ぶ研究所の方とつくった生木の鉛筆を続けてつくる。 ・自分で枝打ちした生木ではしをつくる。 ・木がよりよく使われているものについて調べ活動をする。 ・自分が作ったものに油を塗る。	○子どもの思いが実現できるように、多様な太さやかたち、種類の木材を用意する。 ○木と遊ぶ研究所で体験してきたことを再現できるように万力などの道具を用意する。
10	<b>3 木工について感じていることを共有する</b> ・木の香りや手触りの気持ちよさがとても好きだと話す。 ・まっすぐな木も曲がった木も使い道によっておしゃれに見えるし、世界に一つのものがつくれると話す。 ・つくったものをすぐ使えることが、木のよさだと思うと話す。	○子どもの話を類型化し、板書する。 ○子どもの話題に合わせて、木と遊ぶ研究所の方の話や子どものシートを提示する。
10	<b>4 作文シートを書く</b> ・木っていいものだと思うから、これからも木にかかわることを続けたいと振り返りを書く。 ・つくったものがすぐに生活に使える物になることが楽しいと振り返りを書く。 ・自分が納得するものができると思うと楽しい。木工でつくったものを誰かに見てもらって、木製品のよさを伝えたいと考えを書く。	○「今、自分が感じている木工の楽しみはなんですか」と投げかけ、シートを書く場を設定する。 ○作文シート記入後、必要に応じて、子どもが書いた作文を紹介する。

意する。子どもは、木に触れ、木の香りを嗅ぎながら、「いつでも木とかかわっていられるようなものをつくりたい」と思いを膨らませながら、木工をすることの楽しみをひろげていくのである。

#### ○ 今の木工の楽しみについて表現する場を設定する

子どもは木と遊ぶ研究所の人と活動したことを通して、木の新たな一面を知ったり、これからどのように木工をしたいかについて考えたりしているだろう。そこで、今、自分が感じている木工の楽しみについて作文シートを書く場を設定する。これまでの木とのかかわりを見つめ直し、今後のかかわりについて思いを巡らす中で、「つくったものがすぐに生活に使える物になることが楽しい」「木の香りとかを嗅いでいると気分がよくなる」などと思考し、これからやりたいことの思いを膨らませながら、木工をすることの楽しみを見つめていく。

## 6 活動の振り返り

### (1) 楽しみをひろげる子ども

「この木からなんかスイカのようなにおいがするよ。」「西村さんが持っている、つるが巻いてある木は仙人の杖みたいでかっこいい。」くわどり市民の森で木と遊ぶ研究所の方と一緒に活動した時の子どもの言葉である。くわどり市民の森とは、上越市内の自然環境保全地域に指定されている場所である。木と遊ぶ研究所はくわどり市民の森を主なフィールドとし、森林整備や木工ボランティアなどの事業を行っている団体である。子どもは、くわどり市民の森にある木を見たりふれたりして、期待を膨らませていた。

まず、子どもは木工に使う木を間伐した。切ったばかりの木の香りをあじわうとともに、木のかたちの面白さを感じ取っていた。切った木をくわどり市民の森の管理棟まで運び、子どもは木のかたちや色合いを生かした鉛筆づくりを始めた。鉛筆づくりをするために使用する万力（右写真の子どもが使っている治具）や、銚（下写真の子どもが使っている刃物）、削り馬（下写真の子どもがまたがっている治具）など新たな道具との出会いに目を輝かせていた。



子どもは「切ったばかりの木はやわらかかったからスッと削ることができたよ」と木の固さに目を向けたり、「うまを使って木をけずると小刀よりもきれいに削れてよかった」と新たな道具の優れた点を見つめたりしていた。それは、伐採したばかりの木をそのまま加工することの楽しみや自分のつくりたいものを実現できることの喜びを実感している姿であった。

くわどり市民の森での活動後、作文シートを書

いた。香奈さんの作文シートには、

えんぴつをつくるのが楽しかったし、新しい道具とも、出会えたのでよかったです。でも、一番思ったのは、「学校でえんぴつつくりたい。」

と書いてあった。ここに書かれていることは、香奈さんだけでなく、他の子どもも願っていることだと考えた私は、くわどり市民の森で伐採してきた木と使用した道具を教室に用意し、くわどり市民の森でしてきたことを再現できるようにした。



羽瑠さんは、自分の腕ほどの長さの木を選び、鉛筆をつくり始めた。万力を使って木に穴を開けた後、削り馬にまたがり、銚で木を削っていた。自分が想像しているように木が削れていくことの楽しさを感じていた。鉛筆を完成させた羽瑠さんが「超長くて、超太い鉛筆ができた」と教えてくれた。市販された物ではあり得ない長さや太さの鉛筆をつくることを実現できた喜びを感じ取っていたのであり、生木を使って木工をする楽しみをひろげている姿であったと言えるだろう。

亜美さんは、アブラチャンやモミジの木をのこぎりで切り、切ったときに出てくる粉を集めていた。アブラチャンを切ったときに「何これ。すごくいい匂いがする」と木の香りを感じたことから、木の粉を集めることを思いついたのだそうだ。

「アブラチャンは柔らかいから星2つ。香りは4つ。モミジはあまり香りがしないから星1つにしたの。」仲間と共にそれぞれの種類の木の粉を袋に分けながら、香りや固さなどの分析をしていた藍里さんは、自身の感覚や思いを数値化して教えてくれた。今後、分析したものを図鑑としてまとめ、みんなに伝えたいと考えているようである。



亜美さんの姿は、木の香りや質感の違いに着目しながら、それぞれの木の特徴をとらえることに面白さを見いだしている姿であり、木とかかわることの楽しみをひろげている姿であったと言えるだろう。

### （２）子どもが感じている楽しみ

本時の終末に設定した作文シートの時間に、「今、私が感じている木工の楽しみは」という書き出しで作文シートを書くように促した。それは、自分が楽しんでいることについて考えることを通して、木と自分のかかわりについて見つめることができると思ったからである。



これまでにスプーンやつまようじをつくってきた美香さんは、生活の中で役立つものをつくり、それを使っていくことであると書いた。活動する度につくりたいものを変えてきた花菜さんは木がいろいろなものに変化できることであると書いた。スプーンをひたすら削り、磨き続けてきた由衣さんは、完成するまでのワクワク感であると書いた。木と遊ぶ研究所と出あったことから木そのもののかたちや色を生かそうとした洋介さんは、つくりたいと思ったものをつくるためにいい木を探すことであると書いた。木と触れ、木を切

り、木を削り、木を彫り、木を磨く。子どもは自分なりの視点をもって木とのかかわりをつくってきたのであり、一人一人が見いだしている木とかかわることの楽しみは違うのである。

### （３）目の前の子どもの姿から活動を見つめ、構想、展開する

４年２組の子どもは「アブラチャンや山椒のように、においの強い木は他にもあるのか探してみたいな」と木の種類毎の特徴の違いに目を向けたり、「木にまいてあったつるも木工に使うことはできないかな」と木工を通して無駄なく最後まで使い切ることを思い描いたりしている。こうした子どもが実現したい思いや願いをもとに、子どもにとってよりよい環境をつくることによって、木への愛着をさらに深めたり、木が抱える課題について見つめたりしていくだろう。

創造活動は１年をかけて対象とかかわりをつくっていく息の長い活動である。だから、子どもが今、何を見つめているのか、対象とのかかわりから生まれる思いや願いを基にしながらどのような行為をつくり出しているのかといった、子どもの学びの道筋を教師は見とっていくことが肝心である。教師が講じる手立ては、子どもの学びの道筋に沿ったものであるからこそ、子どもは対象にさらに夢中になり、自ら活動をつくり、つくり変えていくのだ。

〈メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください〉

提案者連絡先 [tfumito@juen.ac.jp](mailto:tfumito@juen.ac.jp)（高山史）